

概 要 報 告

実施期日	令和7年8月1日(金)
部 会 名	中学校 外国語部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『「相手に伝えたい！伝え合いたい！」「相手のことを知りたい！」

と思えるような指導と評価の工夫』

提案概要

学習指導要領の話すこと〔発表〕の力を高めるため、①コミュニケーションの目的や場面、状況などが明確で伝える意味（良さ、楽しさ、学び）がある課題を設定する。②話す内容は友だちとのやりとりを通して考え、互いにアイデアを共有する。③スモールステップで少し頑張ればできることを積み重ねる。以上の3点を授業構成の柱として実践を行った。やりとりを通して、生徒同士の「伝えたい」気持ちを育て、発表につなげていくまでの授業の展開を紹介する。

【実践内容】

本研究は、生徒の実態を探るところから始まった。生徒の英語への意識は、「英語の学習は大切である。」「英語は、将来役に立つ。」という気持ちがありながら、英語で伝えたりやり取りしたりすることに対して苦手意識を持っている生徒が多いという実態があった。生徒が伝えることや伝え合うことの意味や楽しさを感じ、「相手に伝えたい！伝え合いたい！」「相手のことを知りたい！」など「～したい！」と思えるような姿を目指し、自分の気持ちや考えを英語で表現できる力を身に付けさせたいという思いから、生徒にとって身近な内容でアンケートを取り、その結果をグラフや表にまとめ、興味・関心が高いものを課題として設定し、スピーチに至るまでの授業を行った。

提案概要の①において最初に「好きなおにぎりの具」「好きな学校行事」「好きなスポーツ」など、身近な話題でアンケートを取った。そこから、自分なりの理由や考えを持ち、それをシェアするやりとりを生徒同士で行った。次に②では、生徒が言いたいけれど分からない表現や語彙を板書し、可視化して表現を共有した。また、①でとったアンケートをもとにしたグラフについてのやりとりを生徒同士で行った。ここでは、相手に関心を持ち「相手のことを知りたい」という気持ちをはぐくむことを目標とした。最後に③では、最初は3文、次に5文というように少しずつ話せる文を増やしていった。また、ペアワークでQ and Aを行い、その質問に答えることにより、さらに話せる文を増やすことができた。ペアワークの次にグループでの発表も行い、人前で話すことに慣れるようにした。

【成果】

- ・生徒の振り返りと教員の評価より、多くの生徒が概ね目標を達成することができ、課題に対して肯定的に捉え、身に付けたい力に対して自信をつけているように感じた。
- ・やりとりを通して、スピーチの発表まで話す内容を考えた結果、友だちのアイデアを生かそうとしたり、良いスピーチについて共有したりなどの様々な工夫が見られた。
- ・英語が苦手な生徒でも身近な話題を設定したことにより、前向きに取り組めた。

【課題】

- ・一つの单元だけで、考えを変えるのは難しく、3年間通して、人と関わることや英語で表現することは楽しいと思う経験を積み重ねていく必要がある。
- ・生涯を通して英語を学んでいけるような手段を教えていく必要がある。

質疑応答

Q：何も見ずに話している姿に驚いた。単元を進めていくにあたって、子どもたちが言いたいことと教員が使わせたい表現が一致するようにするにはどうしたらよいか。

A：生徒が言いたいと思っていることと、こちら側が教えたいと思っている表現に近づくように、子どもから出たアイデアを可視化する過程で、教えたい表現を意識的に取り入れるようにしている。

協議の柱及び協議概要

『英語で伝え合いたいと思える授業づくりを目指して』

キーワード：授業のアイデア、課題の設定、評価、自分が児童・生徒なら

協議をするにあたって、小学校・中学校の先生方が混ざってのグループに、また、市内の先生方が同じグループにならないように組んだ。理由は、教科横断的な授業実践や市によつての制度などの違いがあり、情報を共有してもらいたいというねらいからこのような形にした。

協議では、付箋紙を使い上記で示したキーワードをもとに、お互いの実践やアイデアなどを書き出し、グループに配付したA3サイズの紙に貼り付け、共有できるようにした。35分間、グループでの話し合いの時間を取った。グループ内の共有では、「Daily Routineの動画づくり」といった子どもたちの間で流行っているようなものを取り入れ、子どもたちが取り組みやすいような工夫をしている学校や「ALTと一緒に英語で調理実習」など教科横断的な活動のアイデアも見られた。以上のようなタスクの設定は、生徒の「伝えたい」または、「伝えなきゃ」という気持ちを刺激するように思える。また、課題を設定する際に目的・場面・状況を明確に設定することにより、子どもたちが積極的に取り組めるようになるメリットが多くあがっていた。

グループで付箋紙に書き出し、共有した後に、ワールドカフェ方式を用いて、色々なグループの協議内容の共有を行った。各グループでは、「コミュニケーション活動を行うときの環境の整え方」や「子どもたちが積極的に取り組めるようにするためには」など困っていることなどもあがっており、アイデアだけでなく、悩み事なども共有でき、有意義な時間となった。

まとめ概要

今回の提案では、スピーチを行うにあたって、まず原稿を書くという概念を外し、ペアワークやグループワーク通して内容を構築していく形を提案した。一つの単元を通して、授業の進度を追いながら述べ、授業の導入から評価までのプロセスを説明している。このことにより、単元ごとのまとまりの実践や評価に至るまでの過程を分かりやすく説明していた。

助言者からは、小学校の外国語活動は、中学までの準備期間ではなく、子どもたちが「話したい」話題に触れて子どもたちの「伝えたい」気持ちを育てていくものであることが述べられた。また、英語を通して、普段はしないような会話からお互いの知らない部分も知ることができることもあがった。さらに、中学校の授業では、「やらされている課題」ではなく、「自ら知りたい、伝えたい」という気持ちになる課題を設定することにより、子どもたちを主体的に学ぶことができるようにしていくことや生徒同士でのやりとりの中で自分自身の考えを整理していくことができていたことも述べられた。最後にスモールステップを踏むためには、終着点のビジョンをもつことの重要性の話があった。

外国語科の目標は、学習指導要領の第2章第1節第1において「簡単な情報や考え方を理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成することと記述があり、今回の研究を通して、①理解する（お互いの話している事柄に興味を持ち、知ろうとする）②表現する（自分の伝えたいことを言う）③伝え合う（自分も頑張ればできる気持ちを育て、相手に知ってほしいと思う）の3点が育まれたのではないかと感じる。

コミュニケーションの目的・場面・状況を明確にすることにより、生徒たちが主体的に取り組む様子が見られることから、授業での課題設定を意識することが大切である。